



# 国土と言葉

本多弘之  
*honda hinoyuki*

九

「國」という本願の言葉なのである。この呼びかけは、人間の精神現象の自覺過程として、法藏菩薩の「機の三願」（第十八願、第十九願、第二十願）となつて展開されているのだといふのが、親鸞の了解である。第十八願は「念佛往生の願」とされてきているのであるが、その願のなかにある「欲生」の語に、淨土教の救済の形である「往生」を内から動かし、

つまり、この世を逃れるすべのない苦惱の場所だと諦めて、次の生にこそ淨土の救いを受けたいという厭離穢土的な「願生淨土」の要求を、愚かで悲しい宿業の凡夫の深い願いであると共感しつつ、それを手がかりとして

我ら凡夫にとつて「彼岸」であるような純粹清浄の場所とは、実は仏陀の大涅槃が開示する法界の相である。つまり、仏陀の自内証であつた法性を、慈悲心のはたらきを通して、他受用（他の衆生にも共通の環境となるよう開いたところ）の場所とするべく「大悲願心」をもつて莊嚴された形相なのである。

そこへの呼びかけの形で、人間の根源に潜む宗教的な要求を呼び起すのが、「欲生我

國」という本願の言葉なのである。この呼びかけは、人間の精神現象の自覺過程として、法藏菩薩の「機の三願」（第十八願、第十九願、第二十願）となつて展開されているのだといふのが、親鸞の了解である。第十八願は「念佛往生の願」とされてきているのであるが、その願のなかにある「欲生」の語に、淨土教の救済の形である「往生」を内から動かし、

つまり、この世を逃れるすべのない苦惱の場所だと諦めて、次の生にこそ淨土の救いを受けたいという厭離穢土的な「願生淨土」の要求を、愚かで悲しい宿業の凡夫の深い願いであると共感しつつ、それを手がかりとして

呼びかけ歩ませて、如來の眞実に触れさせようという大悲の方便であることを明らかにするのである。それによつて現実の苦惱の場こそが、如來の本願がはたらき出るかけがえのない唯一の機縁の場なのだと、自覺させていく。執着して止まない苦惱の旧里を、「転悪成徳」の不可思議力によつて、**大悲無倦**の現成する場と承受できるまでに、育成して止まない内的エネルギーが、親鸞が感受した「欲生心」なのだということなのではないか。

この「欲生」の作用が、その意欲に感應する場の質をも変えていく。だから、親鸞は「願生」の意欲に対応する淨土に、「**眞実報土**」と「**方便化土**」を見分けるを得なかつた。「**眞実報土**」は如來の眞実の願心が感受する「場」であるが、「**方便化土**」は虚偽不実なる人間の業報の影を脱出できない凡夫に対応している「場」なのだといふのである。たとえば、同じものを食べても受け取る私たちの事情次第で栄養豊かにもなり、あるいは病気の原因にもなつてしまつことがあるように、こちらの意欲の質で「場」の質も規定されるのである。

そうだとすると、「曠劫以来」といわれるような抜きがたい宿業因縁の背景をかかえる我ら凡夫は、せめてもの厭離穢土的諦念に沈むしかないのか。そういう質の場しか感じたことがない存在なのだから。だから、死後の

憧れに身をやつすような諦念が大手を振つて、いつまでもまかり通るというわけだ。しかし、親鸞はその悲しい凡夫の諦念の根底に、そなわす「**意欲**」としての願心を感受した。我ら凡夫の表層の意識には決して浮かび上がつてこない願心であるが、表層の沈殿物のさらに深みに、縁あらば吹き上げようとするマグマのごとくにうずくまる「意欲」なのだといふのである。

この「欲生」なる言葉に託された重さは、「三千大千世界を拳ぐるよりも重し」と言われている大菩提心の重みであろう。ずつしりと一切衆生の表層生活の根底に沈殿して待ち続けている力なのである。その表層のあがきを「**恒河沙の諸仏の出世**」のみもとにありしどき 大菩提心おこせども 自力かなわで流転せり」（正像末和讃）と和讃されたのである。どれだけ激しく起つても、表層に現れるときには、「流転」を免れないのだ、と。どこまでも根源に沈殿して待ち続けるのだ、と。この願心を「**兆載永劫**」の修行とも表現するのであるが、この表現は純粹なるものを、不純粹な汚濁としてしか現象しないレベルに見いだそうとするなら、未來永劫に見いだせないことを言わんとするものである。

『淨土論』では解義分の「**起觀生信章**」とされる一段で、「云何が観じ云何が信心を生ずる」という問いを論主（天親）自身で起こ

し、「観」を通して信心を生み出そうとする意図を語つてゐる。この「観」の内容を「五念門」（礼拝門、讚嘆門、作願門、觀察門、回向門）に展開して、あたかも衆生が修行して見仏の利益を得られるように語らっているが、この「観」が如來からの「一切衆生を觀そなわす」ことを語つてゐるのだといただいて、五念門行の主体は法藏願力だと読んだのが親鸞の「回向」理解なのであつた。

そういう読み方は、凡夫の事実を徹底的に無能・無知・罪惡深重と自覺し抜いた視点から、かえつて大悲の眼が凡夫に映写してきた智見なのだといふしかあるまい。いささかでも、凡夫の側に、修行して仏に近づける可能性の残滓を認知している限り、五念門は衆生の行為であると読むであろう。智愚の毒を離れられない悲しき事實を、存在の根底まで染み通つた大悲にもよおされてのみ識知しうる。そのとき、如來の純粹なる「欲生心」こそが、淨土の莊嚴を自己の場所として表現できるのだ、と承知できたのであろう。

「**弘誓の強縁**、**多生にも値い**がたく、**眞実の淨信**、**億劫にも獲がたし**」（教行信証）総序とは、この大悲心の眼力が自己を貫いた感動を言うものなのではなかろうか。

（ほんだ ひろゆき・親鸞佛教センター所長）